

歴史の中の 女たち

第 39 回

マリエッタ・デ・ベインテミリヤ
(1855 ~ 1907 年)

— エクアドルのファースト・レディー —

伊藤 滋子



マリエッタ・ベインテミリヤ

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Marietta_de_Veintimilla_\(circa_1883\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Marietta_de_Veintimilla_(circa_1883).jpg)

マリエッタは 1855 年、ペルーからエクアドルの港グアヤキルに入ろうとしていた船の中で呱呱の声を挙げた。父親のホセ・ベインテミリヤはエクアドルの名門の出身でまだ 31 歳ながら将軍の称号を持ち、苗字も容貌もイタリア系であることを覗わせる。彼は駐在していたリマにイタリアのオペラ団が来訪して公演したとき、20 歳の美しい歌姫マリエッタ・マルコーニに魅せられ、妊娠した彼女を連れて駆け落ちのようなかたちでグアヤキルに連れ帰ってきたのだった。

幸い両親は無事正式に結婚できて、ベインテミリヤ家の嫡子として生まれたマリエッタはリマの劇場を嵐のような拍手で沸かせた母の子守唄を聞いて育ち、オペラさながらのドラマチックな人生を送ることを運命づけられたかのようだ。4 年後、一家がキトに移り住んだ折に催された将軍の妻、すなわちマリエッタの母の社交界デビューの華やかさは、長い間キトの上流階級の夫人たちの語り草となったほどであった。だがほどなくして母親が彼女と生まれたばかりの弟を残して他界し、父親のホセは娘をキトの尼僧院付属の学校に預けてグアヤキルに行ってしまったので、叔父のイグナシオ・ベインテミリヤ (1828 ~ 1908 年) と叔母たちがマリエッタの親代わりとなった。金髪で碧い目の、まるで天使のようと言われた美少女のマリエッタをイグナシオはこよなく可愛がり、マリエッタも彼を深く敬愛し、実際のイグナシオは抑制のきかない野望家だったが、彼を全能の人と信じつつ育った。

当時エクアドルは独裁者ガルシア・モレノ (1821 ~ 75 年) の恐怖政治のもとで呻吟していた。彼がエクアドルを支配した 17 年間のあいだ、何度も自由主義者や先住民の反乱が起きたが、その都度鎮圧されている。1869 年、マリエッタが 15 歳の時、父がグアヤキルで起こした反乱もそのひとつで、ホセ・ベインテミリヤは捕えられて銃殺されてしまう。叔父のイグナシオも逮捕されたが、金持ちの女友達が用意してくれた 1 万ペソの保釈金で釈放されてパリに渡り、貧困に耐えながら亡命生活を送った。まだ 12 歳のマリエッタの弟、ホセ・イグナシオまでもが国外に追放された。それまでマリエッタは遠縁にあたるガルシア・モレノの妻の口添えで政府の奨学金を支給されていた。だが父の反乱でそれも打ち切れ、その後叔母たちが学費を工面してくれたが、支払いは滞りがちだったという。

1875 年、ガルシア・モレノが政治的理由というよりも私怨から、マチュテ (山刀) でめった切りにされて殺された。それは彼が独裁者としてやってきたことと釣り合いが取れているという人もいたが、それで一気にエクアドルが文明的な民主国家に変わることはなかった。自由主義者たちは新大統領ボレロに期待したが、彼は蛮勇を振るって国に変革をもたらすことはせず、国民の失望は大きかった。そこへイグナシオ・ベインテミリヤ、後の自由主義の旗手エロイ・アルファロ、文筆の戦士モンタルボなど、これまでガルシア・モレノから迫害されていた自由主義者たちが続々と、それ

ぞれの幻想を抱いて亡命先から帰国し、エクアドルは革命前夜の様相を呈した。軍に復帰したイグナシオはいち早く、帰国の翌年の1876年、グアヤキルで革命を起こし政権を奪い取った。放縦な生活を送っていた彼は正式な妻をもたず、一緒に大統領宮殿に入った彼の姉妹たちは当時の家庭婦人の常として聖人や宗教のことにしか関心がなく、ファースト・レディーの役割は姪のマリエッタが務めることとなり、いよいよ彼女自身が主演するオペラが始まる。

知的でエレガントな女性に成長していたマリエッタはこの時21歳、自分が主役を演じる舞台となる大統領宮殿をヨーロッパの王宮風に模様替えして、豪華な舞踏会や宴会を取り仕切り、あるいは伯父の傍で外国の使節を接見して宮殿の華となり、申し分のないファースト・レディーの役目を果たした。母親譲りの音楽の才があり、文学、芸術、政治に興味を持っていた彼女が宮殿で開くサロンはキトの音楽や詩の中心地となり、国内外の詩人が彼女に詩を捧げ、多くの学者たちが集った。祝祭日には大統領である叔父と共にカテドラルの主ミサに出席したあと、町を練り歩く軍の行進の先頭に立つ。当時女性が外出するときは黒の分厚い服を着て家族の中の男性にエスコートされるのが常だった。だがマリエッタは女友達と共にヨーロッパ製の軽くて華やかな色の服を着て日曜日、女たちだけで賑やかに公園を散歩したものだ。こうして彼女は習慣を変え、公園を整備し、劇場を建造し、キトの街の美化に努めた。

ファースト・レディーとはいえマリエッタはまだ若く、賑やかなカーニバルが好きだった。だが興にのりすぎて足の骨を折り、その手当てに呼ばれた医師と恋に落ちるが、彼は既婚者だった。それを知った叔父は医師を投獄し、鞭打ちの刑に処したのち去勢するように命じたが、彼の妻の懇願でかろうじて放免された。以来妻もマリエッタも二度と彼と会うことはなかった。25歳の時、東の間の結婚も経験している。夫は貴族の血を引く駐エクアドルのフランス公使の息子だった。結婚の翌年、彼女は妊娠したが、夫は税関長に任命され、単身グアヤキルに赴任していった。しかし生まれた子供は夭折、夫までもが当時グアヤキルで猛威をふるっていた黄熱病に倒れる。2カ月間喪に服したあと宮殿の生活に復帰した彼女は、以前にも増して美しく艶やかに見えたといい、短い結婚生活は彼女にほとんど何の痕跡も残さなかった。

叔父イグナシオ・ベインテミリャの評判はあまり芳しくない。彼は自由主義者たちの正義、自由、進歩

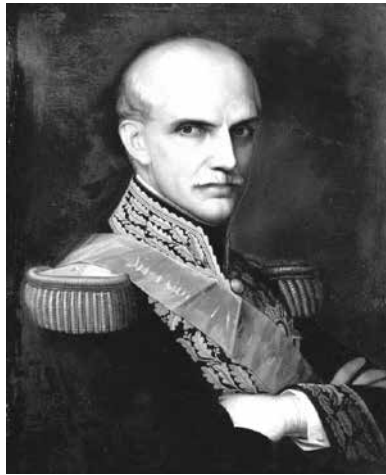
が実現されるだろうという期待を担って登場したのだが、実際に行ったことといえば、ガルシア・モレノと同じく、人の財を略奪し、言論の自由を奪い、前述のような鞭打ちなど、まるで中世のような刑の伝統をそのまま踏襲した。ガルシア・モレノの場合は独裁者として絶対権力を握り、国民に「黒い憲章」と呼ばれた前近代的な憲法を押しつけて、決してそこに書かれた原則を曲げなかった。彼は国民に宗教の自由を認めず、前世紀に追放されていたイエズス会を呼び戻して、独立以前のように公教育をカトリックの手に委ねて、神政政治を敷くことを公言していた。これに反してベインテミリャは自由憲法を標榜したにもかかわらず全くガルシア・モレノと同じように暴君として君臨したうえに、平気で憲法を蹂躪して政敵に迫害を加えた。

彼はカカオの豊作や太平洋戦争（1879～83年、ペルー、ボリビアの連合軍と英国の支援を受けたチリとの間の硝石をめぐる戦争）の影響で自国の景気が良いのをいいことに、公共事業を増やしたりして、民衆を懐柔することには長けていた。だが宗教心も主義主張も持ち合わせていないのだから始末が悪い。ベインテミリャ政権が始まってまだ間もないころ、大統領、閣僚が参列するカテドラルでの聖金曜日のミサの最中に、政敵であった大司教が聖餐の葡萄酒に混入された毒で殺されるという事件が起きた。女性問題で大司教から懲罰を受けた聖職者が犯人とされたが、それを信じる者はなく、保守派は首謀者は大統領だと断罪して、遂にバチカンとの外交断絶にまで発展した。毒舌の批評家モンタルボは彼に“短剣のイグナシオ”という、暗



イグナシオ・ベインテミリャ

https://es.wikipedia.org/wiki/Ignacio_de_Veintemilla



ガブリエル・ガルシア・モレノ

https://es.wikipedia.org/wiki/Gabriel_Garc%C3%ADa_Moreno

殺者を暗示する呼び名を献上した。

だが盲目的に叔父を愛するマリエッタにはこれらのことは目に入らない。未亡人となった彼女は大勢の男たちから寄せられる甘い言葉を儀礼的に受け流し、以前にも増して政治に情熱を燃やすようになった。しかも享楽的な叔父のベインテミリャは、マリエッタの父と同じく、窮屈なキトよりも開放的なグアヤキルを好み、彼女と側近たちに政治を任せて、自分を独裁者として認めさせる運動のためと称してそちらへ行ってしまった。

マリエッタは叔父に代わって軍を閲兵し、彼らの意気を高揚させる演説を行い、兵士たちの尊敬を勝ち得て、將軍の女性形ヘネラリタ La Generalita と愛情を込めて呼ばれるようになる。だが、1882年、彼女を補佐するはずの軍務大臣を務めていた將軍が保守派と結託してクーデターを起こそうと、大統領から秘密の命令を受けたと偽って、真夜中に全軍を大統領官邸前の広場に召集した。それに気がついたマリエッタは純白のドレスに身を包み、頃合いを見計らって、護衛もつけずにただ一人で広場に降りて行った。そして昂然と將軍の嘘を暴き、兵士たちに「ベインテミリャ大統領、万歳！ 我らのヘネラリタ、万歳！」と叫ばせて、叔父と自身に忠誠を誓わせた。その上で將軍の逮捕を命じて彼を解任し、反乱を逆手に取って、政治と軍事の両方の権利を掌握し、叔父に独裁者の称号を付与することを宣言をした。

マリエッタの機知でクーデターは不発に終わったが、国内に満ちた政治的不満は抑えがたく、エクアドルは各地で保守派、自由派が入り乱れて反乱やゲリラ戦が渦巻く混沌とした時代へと突入した。1883年1月、つ

いに蜂起軍は首都キトを包囲したが、マリエッタは降伏に応じず、弾が飛び交う中をピストルを片手に、数は少なくなったが最後まで彼女に忠誠を尽くす兵士たちを鼓舞して戦ったことは歴史的な伝説となっている。そしてすんでのところ市内に突入してきた敵の部隊を撃退できるところであったが、雨が降り出して攻防戦が中断され、その間に新たな敵の援軍が駆けつけて戦況が逆転し、結局敗北した。

捕らわれたマリエッタは市庁舎の一室に幽閉された。ところが彼女に魅せられた見張りの若い兵士たちはさまざまな便宜を与えたうえに、セレナーデ（求愛の音楽）まで贈ったものである。怒った上役は彼女を監獄に移したが、護衛に囲まれて6ブロックを歩かされるのをキトの人々は親愛の情をこめて見送った。

のちに彼女はその監獄のことを、「そこはまるで墓場、寝るのは泥だらけの床、レンガの隙間に蠟燭が灯され、そのほかには何ひとつない。昼も夜も一日に20回、20人もの見張りが大声で叫びながら巡回するので眠れたものではない。食事は軍隊の習慣として銃剣でかき混ぜる」と書き、そこで行われる身の毛もよだつ残酷な拷問を描写した。叔父が行った残虐行為は正当化するのだが…。

とうとう病気になる、ようやくフランス大使公邸へ亡命することが許された。国内外の著名人や外交官など実にさまざまな人がマリエッタを訪問するものだから、一時は大使公邸がキト社交界の中心となったほどだった。不安を募らせた新政府はベインテミリャ家の全財産を没収、叔父と彼女ばかりでなく弟や伯母たちまで国外追放とした。その命令が出された日の夕方、アラメダ公園に散歩に出たマリエッタのあとを友人や大勢の人々がついて歩き、出発の前夜にはキト市民が彼女に別れのセレナーデを贈った。グアヤキルへ向かう道すがら、船がペルーへ出航する時も大勢の人々がバルコニーから彼女に白いハンカチを振って別れを惜しんだ。1884年9月、29歳のマリエッタは7年の宮殿暮らしとそれに続く1年半の捕らわれの生活ののち、リマに亡命した。

リマに着くや、彼女は活発な執筆活動を始める。これまでも政治と文学は常に彼女の最大の関心事であったし、何しろすでに有名人だったから、各紙はこぞって彼女の記事を求めた。だが、カアマーニョ新大統領政権を批判する彼女の記事が新聞に掲載されると、エクアドル政府はペルーに対しイグナシオ・ベインテミリャを裁判にかけると送還することを要求した。

そこで彼は姉妹たち、姪マリエッタ、甥ホセ・イグナシオをリマに残してチリのサンチアゴへ出国し、以来再び故郷の土を踏むことはなかった。リマに残った一族の生活を支えたのは、マリエッタの執筆活動と弟ホセ・イグナシオの音楽活動であった。彼らはリマ社会で暖かく迎え入れられ、マリエッタもよく大きな舞踏会や晩餐会に招かれてピアノを弾き、素晴らしい声で歌った。

だが常に彼女の最大の関心事は政治にあり、その集大成が1890年に出版された『エクアドルの出来事(Paginas de Ecuador)』である。411ページもあるこの書は彼女の立場から見たエクアドルの政治情勢を描いたセンセーショナルなもので、ペルーで出版された本は弟の手でグアヤキルに運ばれて国中に流布し、怒りやあらゆる類の批評を巻き起こした。ある批評家は「奇妙な実と魅惑的な虚を織り交ぜた、女性の筆によるものとは思えない完璧な出来だ。人物描写の正確さと公平さには驚嘆させられ、機知に富んだ、独創的な風刺には爆笑せずにはいられない。また生き生きとした、色彩豊かな表現力と巧みにして心地よい文体には、そのような機知とウイットを持ち合わせない多くの学者も色を失ったことだろう」と評している。時のエクアドル大統領までがペルーの新聞紙上でマリエッタと論争を繰り広げ、世論を沸かせた。

自由主義革命が始まると、1892年頃マリエッタはグアヤキルに赴きエロイ・アルファロ将軍に伯父をキト進軍軍の総指揮官とするよう頼んだが、年金の支給を約束されただけでリマへ戻った。だがアルファロの自由主義政権が確立すると、亡命を解かれたマリエッタは1898年9月エクアドルに戻り、没収された財産の返還を受けて農園経営に乗り出した。水路を開き、トウモロコシやアボカドを植え、祈祷所、プール、グランドピアノの置ける音楽室、リマで凝り始めた心靈術の集會に使う暗い小部屋を備えた家を建てた。その部屋には右手に十字架、左手にスクレの骸骨を持つマリア・マグダレナの裸像の油絵を描かせた。南米の独立の英雄ボリバルの右腕だったスクレは彼女が最も崇拜する人物で、当時その遺骸が発見されて（これには異説もあり）キトの大聖堂に移されたばかりだった。

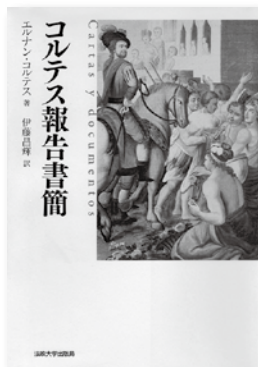
1904年には居をキトの中心部に移し、執筆活動に専念、賛同者たちと共に定期的に文学や政治、法律を扱う数種類の小冊子を発行し、マダム・ローランの紹介記事など自ら書いたものを発信し、彼女が編集長をしていた隔週発行の『ラ・パラブラ』はその後日刊紙に

なるほどの隆盛をみる。

49歳で亡くなる一ヶ月前のこと、300人以上の聴衆を前にして、マリエッタは「近代心理学」という題で新しい時代における女性の役割についての当時としてはかなり斬新な見解を披露する講演を行い、各新聞もただちに彼女の意見に賛同した。

マリエッタはペルーにいた時から叔父ベインテミリヤ将軍をもう一度権力の座に戻す画策をしていたが、1907年、いよいよそれが本格化し、武力蜂起を準備するために北部のチョタ溪谷に赴いた。だがそこでマラリアにかかり、重篤となりながらキトの自宅に帰りついていたが、服を着替える間もなくベッドに倒れ込み、そのまま息を引き取った。51歳であった。叔父イグナシオはペルーに居たので、アルファロ大統領が葬儀を執り行い、どの新聞も思想と闘争の女性として彼女の功績を讃えた。イグナシオはとうとうエクアドルに帰ることなく、翌年リマで没した。

(いとう しげこ)



『コルテス報告書簡』

エルナン・コルテス 伊藤昌輝訳 法政大学出版局

2015年11月 582頁 7,400円＋税 ISBN978-4-588-37404-3

メキシコの征服者エルナン・コルテスが、戦いの最中にスペイン王カルロス1世（神聖ローマ皇帝カール5世）宛てにしたためた五通の書簡の完訳。コルテスはほんのひとにぎりの冒険家を率いて、あの好戦的なアステカ民族とその壮大な帝国に立ち向かいこれを征服した。米国の歴史家ウィリアム・プレスコットも、アステカ文明崩壊のいきさつは現実の歴史というよりまるで小説のようだと述べているが、まさに騎士道小説さながらであるといえよう。コロンブスが「新世界」に到達してから20数年間、スペイン人と西インド諸島、つまりカリブ海の大アンティール諸島先住民との接触はあったが、メキシコの先住民社会はアンティール諸島のいわば未開の先住民とは質的に異なる高度な文明をもっていた。したがって、コルテスのメキシコ征服はヨーロッパと「新世界」の真の意味での最初の文化的衝突であった。

スペイン人征服者たちは必ずしも「黒い伝説」が描くような破壊と掠奪の権化でもなく、「白い伝説」が謳うようなキリスト教の教えを広める聖人と騎士の集団でもなかった。コルテスの実像を把握するためには、論争的立場からではなく、冷静に、一次資料に即して彼の人間のおよび政治的側面に迫るべきであろう。彼の書いたものを読めば、一般のコルテス像とは違ったイメージが現れるのではないかとと思われる。

宗教的理念を語りつつ現実主義的外交を駆使し、冷徹な軍人として陣頭に立ちながら占領後の植民地経営を見据え、中世と近代のはざまを駆け抜けたあまりにも多面的な「征服者」の虚実が明らかになる。

〔伊藤 昌輝－訳者〕



『楽器は語る スティールパンから津軽三味線まで』

富田 晃 千里文化財団

2015年9月 159頁 2,800円＋税 ISBN-978-4-915606-68-7

著者は東京芸大でデザインを学び、ホンジュラスで造園と木工を指導する海外青年協力隊員として活動、その後中米のカリブ海沿岸に住む Garifuna（セント・ヴィンセント島の先住民と西アフリカから奴隷として連れてこられた黒人との混血）に関心をもったこともあって文化人類学を専攻した経歴をもつ。

本書は楽器学・比較音楽学の視点から、グアテマラの、スペイン人到来前のマヤ世界にはなかったマリンバ（共鳴胴をもつ大型木琴）、大きな弓の弦を叩くカランバ、摩擦太鼓のサカブチェの出生の秘密を探り製作法を尋ね、ホンジュラスのガリフナにとって先祖の霊と繋がる神器であるマラクスを振る儀式や行事、トリニダード・トバゴのドラム缶を打楽器に昇華させたスティールパンについては、その製造法、音階配置と音の違い、さらに日本における受容と普及の経緯、著者の専門分野である製作し演じるという教育活動まで詳しく紹介している。これらに現在著者がいる弘前大学の地元が本場の津軽三味線の歴史、沖縄三線との比較などを加えた、いわば中米カリブの「楽器の文化史」といえるものである。

〔桜井 敏浩〕